

④ 縮約形について

丸 山 和香子

1. 目的と方法

この稿では、話しことばによく見られる、〈表-1〉にあげた形について考察する。書きことばでは、ふつう左側のように記されるものが、話しことばでは右側のような表現となっている場合がある。縮約形とか短縮形とか呼ばれる型である。(他にも、～けど、いろんな、など縮約されたものはあるが、今回は対象からはずした)

〈表-1〉 書きことばと縮約形の対応

	書きことば	→	話しことば
(1)	～ている	→	～てる
(2)	～しておく	→	～しとく
(3)	～では	→	～じゃ
(4)	～してしまう	→	～しちゃう
(5)	～ては	→	～ちゃ
(6)	～なければ	→	～きゃ
(7)	～の	→	～ん
(8)	～という	→	～って
(9)	～と(いう)	→	～って(いう)

〈表-1〉にあげた表現が、今回資料とした対話で使われている様子を分析し、

- (1) どの縮約形がどの位使われているか。
- (2) 縮約形の使用は一般化しているか、それとも、個人による使用差があるか。
- (3) 応対者や話題によって、縮約形の使用に差があるか、特に敬意表出と関係があるか。

などの点につき、検討を加える。

まず、検討する方法を明らかにするために、縮約形を比較的頻繁に使っている人物・ケース6のゲストと、インタビュアーとの対話を引用する。対話を文字化したものの中で、検討すべき箇所には下線を施す。下線部分が〈表-1〉の(1)～(9)の項に該当する場合、それぞれ該当する項に数えあげる。下線部分×印のつい

ているものは、数えあげていない。その採否の理由を、例の一部を用いて次に説明しておく。

〔I〕

はあ、そうですか。でも、あの、こうバイクな[×]んか乗[×]ってると、自分がこう変わる[×]って[×]いう[×]ん[×]で[×]しょうか、……そういうこと[×]って[×]あります……。

〔G〕

ありますね。あの、……たとえば、そういう運転している自分を見て、反対に客観的にすごく見える[×]ん[×]ですよ。で、その、制御できない自分[×]と[×]かね、そういう状況のときに、いろんな状況のときに、自分がな[×]ん[×]て[×]いう[×]と[×]かね、どういう行動をとる[×]って[×]いう[×]の[×]、……すごい客観的に見て[×]る[×]ん[×]ですね。全部な[×]ん[×]か、分析でき[×]ちゃ[×]って……だけど、自分[×]って[×]ね、なんてね、いやな人間だろう[×]って、思いましたね、……やっぱり、ラリーいって。それまでは、こう、ま、ちょっとつくろってね……私[×]って[×]こんな人間かな[×]って[×]のが、あったけど、ガラガラとくずれ去る[×]という[×]か、まあ、所詮、そんなも[×]ん[×]だからね。ま、一からがんばらな[×]きゃ[×]だめだよ[×]って[×]いう[×]ふう[×]に思った、ほんとに。

なんにも飾りがなくてね、どういうことやる[×]か[×]って[×]いう[×]と[×]、やっぱり、こう、ただただ、生きる[×]と[×]か、完走するために向かうわけだけど、余計なこと[×]っ[×]て[×]、背負いすぎてる[×]ん[×]だ[×]なあ、みたいなね、でも、背負うことは、悪いこと[×]じゃ[×]ない[×]と[×]思[×]う[×]ん[×]です[×]け[×]ね。

〔I〕

そうすると、あの、最初に乗ったときのね、な[×]ん[×]か、そういう、な[×]ん[×]か、体に感じるもの[×]って[×]、何かあります……。

〔G〕

あります。やっぱり、それまでは自転車の世界だった[×]ん[×]です。

〔I〕

はいはい。

「こうバイクな[×]ん[×]か……」では、書きことばでは、「こうバイクな[×]ど[×]か……」あるいは、「こうバイクな[×]にか……」となる表現であり、「こうバイクな[×]のか……」

…」とはならない。したがって＜表－１＞の(7)の＜の→ん＞の変化とは認められないので、採録しない。

「こうバイクなんか乗[×]ってると、自分がこう変わる[×]っていう[×]んでしょうか……」では、「乗[×]ってる」は、書きことば「乗[×]っている」の縮約形、「変[×]わる[×]って」は、「変[×]わる[×]と」「いう[×]んでしょうか」は「いう[×]の[×]でしょうか」となるので、「変[×]わる[×]って」の方は＜と→って＞、「いう[×]んで」の方は、＜の→ん＞の項に該当する。

「……そういうこと[×]って、あります」は、形の上、発声の面では、＜って＞であるが、今回は、次に「いう」と接続する場合をとりあげているので、採録しない。（この＜って＞は、文法上＜表－１＞の＜って＞と、機能の違いがあるが、それについては、別の機会にふれたい）

「そういう運転をして[×]いる自分を見て、反対に、客観的にすごく見える[×]んですよ」では、「……い[×]る自分」は、縮約形では、「……る[×]自分」となる可能性のある表現なので、「……い[×]る」を採録する。

「で、その、制御できない自分[×]と[×]かね……」の「と[×]かね」は、「いう」に接続していないので採録しない。

少しとんで「行動とる[×]っていうの[×]……」の、「って」は採録し、「いう[×]の[×]……」の「の」は、機能の面では、動詞につき準体言を作っているのだが、同時に、いいさしの形でもあり、この部分、そのまま、＜の→ん＞とはなりにくいので、採録しない。

「私[×]って」の「[×]って」は「いう」に接続しないので、採録せず、「人間かな[×]って[×]のが」では、「[×]って」が「という」全体の縮約形なので採録し、「[×]のが」の「の」は、準体言を作っているので、採録する。

このようにして、採録していくと、＜表－１＞の、(1)～(6)及び(8)については、比較的明確に、採録するか否かを定めることができるが、(7)の＜の→ん＞の形と、(9)の＜と+いう＞→＜って+いう＞は、なお検討の余地を残している。この(7)と(9)については、後の部分でもう一度とりあげることとする。

2. 話しことばに多い縮約形

このようにして、22人のゲストと、インタビュアーの両者の、＜表－１＞に

該当する表現を数えあげたものが、〈表-2〉〈表-3〉である。書きことばと縮約形を上下二段に組み合わせてある。

個人差を無視して、全体をみると、ゲスト22人は、下のような高率で縮約形を使っている。(1)の場合、書きことばならば、〈ている〉と表現される107例中、対話中에서도〈ている〉を使っている場合15例、〈てる〉は92例であり、縮約形の使用は86%となる。他も同様に計算してある。

- | | |
|------------------|-------|
| (1) 〈ている→てる〉 | 86 % |
| (3) 〈では→じゃ〉 | 99 % |
| (4) 〈してしまう→しちゃう〉 | 100 % |
| (5) 〈ては→ちゃ〉 | 84 % |
| (6) 〈なければ→きゃ〉 | 93 % |

また、インタビュアーの、22人のゲスト全体に対しての使用状況をみると、次のようである。

- | | |
|------------------|-------|
| (1) 〈ている→てる〉 | 70 % |
| (3) 〈では→じゃ〉 | 100 % |
| (4) 〈してしまう→しちゃう〉 | 88 % |

ゲストの場合(2)は使用する場面がなく、インタビュアーでは、(2)・(5)・(6)は使用している場面がなかった為、言及できない。

〈てる〉・〈じゃ〉・〈しちゃう〉については、ゲスト、アナウンサーとも、高い割合で縮約形を使っており、この三種は、話しことばに定着しているといえよう。また、いずれも22人の女性ゲストの方が、男性インタビュアーよりも高率で縮約形を使っている。

今、書きことばと話しことばの特徴を、ある側面からひろいあげてみると、

書きことば — 公のことば — 晴れのことば — 形式ばったことば — 整ったことばと連想がひろがるのに対し、

話しことば — 仲間うちのことば — 日常(け)のことば — 親しいことば — 不整なことば、ともいえる。言葉を伝え合う対者との距離が遠ければ、話しことばは書きことばへと近づいていく。この立場から、今回の縮約形の使い方をみると、女性のゲストの方が、多く縮約の形を用いている。

〈表-2〉 ゲストの使用頻度 (対照表)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	計	備 考
ヶース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	計	備 考
ている	1			2		1			3	1			2	2	1	2							15	
てる	4	1		1	8	18		2	1	1	6	2	3	2	8	5	4	9	4	6	2	5	92	
してお																						(86)	縮約率	
しとく																						0	0	
では																							1	
じゃ	2	10	2	3	15	5	3	1	5	5	1	3	12	7	1	4	11	9	8	3	13	122		
																						(99)	縮約率	
してしま																							0	
ちゃう	2	3	1		6	10	3	2	1					5	1	3		1	4	2	4	48		
												2					1					3		
では														4		1	4			1	2	16		
ちゃ			2						1	1												(84)	縮約率	
										2												2		
なければ		2				1				1	1					1		3	1	10	1	7	28	
きゃ																						(93)	縮約率	
の	5	2	1	3			1	1	1			1		1		2	1		1	2	2	24		
ん	19	18	41	39	22	73	25	14	47	27	36	11	25	31	45	27	33	38	33	58	22	33	717	
	(79)	(90)	(97)	(92)	(100)	(100)	(96)	(93)	(97)	(100)	(91)	(100)	(100)	(96)	(100)	(93)	(97)	(100)	(97)	(96)	(91)	(100)	(96)	發音化率
という	3	7	16	8	8	7	1	33	11	32	3	7	4	14	22	3	20	15	27	6	2	2	251	
って	2					3	2								2		2	3	3	5		3	25	
																						(8)	縮約率	
という	2	7	11	10		10		7	8	17	3	7	3	10	3	1	3	5	4	7	4	2	114	「って」より「と」
っていう	23	62	20	3		38	29		8	3	14	15	1	19	4	23	6	26	7	45	9	12	367	
	(92)	(89)	(64)	(23)		(79)	(100)	(0)	(50)	(15)	(82)	(68)	(25)	(65)	(57)	(95)	(66)	(83)	(63)	(86)	(69)	(85)	(76)	促音化率

〈表-3〉 インタビュー어의ゲスト別使用頻度 (対照表)

ケース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	計	備 考
ている				1									2	1	1								5	
てる			2	1				1	1			2	1		1	1	1		1				12	
しておく																							(70)	縮約率
しとく																							0	
																							0	
では																							0	
じゃ	2	1	1	1	1	1	2			3	4	2	2		1	1		2	1		3		28	
してしまう												1											(100)	縮約率
ちゃう	1	1	1			1	1								1		1	1					8	
																							(88)	縮約率
では																							0	
ちゃ																							0	
なければ																							0	
きゃ																							0	
の	1		1	1			1	1	2			1	1		1		4			2	1	1	18	
ん	29	5	22	22	18	12	11	7	17	15	14	21	16	10	25	6	17	8	11	13	6	6	311	
	(96)	(100)	(95)	(95)	(100)	(100)	(91)	(87)	(89)	(100)	(100)	(95)	(94)	(100)	(96)	(100)	(80)	(100)	(84)	(92)	(85)	(100)	(94)	読音化率
という	7	3	5	11	8	4	4	11	19	17	8	9	5	6	8	6	2	5	9	1	4	5	157	
って	1				4	3					2		1		4				2				19	
																							(10)	縮約率
という	1	4	2	10	1	1		1		9	1	9	2	4	2			2					57	「て」ト 「て」ト
っていう	6	14	8	1	4	6					10	22	2	1	7		1	4	1	14		5	105	
	(85)	(77)	(50)	(0)	1	(80)	(100)	(0)		(0)	(90)	(70)	(50)	(20)	(77)		(100)	(66)	(100)	(14)	(0)	(55)	(64)	促音化率

「ととのった形は互いにあまりよく知っていない者の間やあらたまつた場合に現われることが多い」とし、「音形として話しことば的な一種の融合形を使うか、融合しない形を使うか」を敬意の差とみる南不二男氏（「敬語の機能と敬語行動」『岩波講座日本語 4』）の見方に従えば、この女性たちの話しことばはインタビューの男性より丁寧なものではないことになる。

3. 使用の少ない縮約形<という→って>、使用の多い<という→っていう>

<表-1>の(8)・<という→って>については、ゲストで9%、インタビュアーで10%が縮約形を使っており、他に比べ、その使用率は低い。<という>がそのまま<って>に移行するには、特別な条件が必要であろう。

<という>を多く使っている、ケース8の場合を引用する。

〔G〕

そーですネ。かかわる方も、こうやっぱりしんどかったですネ。日本ではネ、ずいぶんこう、戦争というのは風化しているという感じが強かったですから、やっぱり改めて外に出て、風化してというのは、日本だけの現象なんだナというのを、ものすごく、こう、自分にも突きつけられた、そういう旅だったと思います。

これに対し、<という>を<って>として使っている場合の多いケース20を引用する。この部分には、<という→って>と<という→っていう>が多く出てくる。

〔G〕

まあ、約丸三年ってことですかねえ。だから、やっぱり、相当な方が見てくださった、ええ……（中略）。

〔I〕

はあ、なるほどね。そういう、あの、「痴呆老人の世界」でこう一番お感じになったことって、どんなことでしたか。

〔G〕

あのー、なんか痴呆老人っていうと、なんにも分かんないんじゃないかと皆さん思うし、まあ、お話しすれば、とんちんかんっていう感じですけど、あの、それぞれ、ハートっていうんでしょうか、なんか、こう、自分がそれなりに、い

っしょうけんめい生きたいという気持ちはネ、みんな、かわらずに持っている……。

〈という→っていう〉の縮約形の多い、ケース20の場合でも、〈という→って〉となるのは、「丸三年ってことですかねえ」の一例のみであり、他は、〈と→って〉となり、そのあとに、「いう」がついて〈という→っていう〉の形をとっている。

ケース8の場合は、〈という→っていう〉の形を使わず、殆んど〈という〉を使い、書きことばの性格をもった話し方をしている。しかし、この部分も、対話でなく初めから、文章として書いた場合、〈という〉のいくつかは不要となり、「ずいぶん、戦争は風化している感じが強かったですから……」となるであろう。その意味では〈という〉は、話しことばに多く使われる表現であり、直接的表現をさけ、少々輪郭をぼかす効用があるといえる。この部分を表現しなすと、

- (1) 戦争は風化している感じ
- (2) 戦争というのは、風化しているという感じ
- (3) 戦争ってというのは、風化しているっていう感じ
- (4) 戦争ってというのは、風化してるっていう感じ
- (5) 戦争ってのは、風化してるって感じ

のように、(1)から(5)へ順次、話しことばとしての度合いが強くなる。ケース8は、話しことばであっても、なお(2)の段階の表現を使っており、(3)・(4)・(5)にくらべ、整っている印象を与え、対談の相手や、視聴者に対し、距離を保っているといえよう。これに対するインタビュアーも、ケース8のゲストには縮約形を使う例が他のゲストに対するときより、少なくなっている。

全体として、〈という→って〉の縮約形、〈って〉の使用率は、ゲスト9%、インタビュアー10%であるのにくらべ、〈という→っていう〉の使用率は、ゲスト76%、インタビュアー64%である。〈という→っていう〉については、個人差のあることも含めて、次の項で検討する。

4. 促音<って>になる<と>の機能

再び、この調査の方法のところで例示したケース6の対話部分から、〈と〉と発声されている部分、及び〈って〉と発声されている部分を抜き出してみる。

〔I〕

(11) 変わるっていうんでしょうか。

(12) そういうことってあります。

〔G〕

(13) 行動をとるっていうの

(14) 自分ってね

(15) いやな人間だろって

(16) 私って、こんな人間かなってのが……

(17) だめだよねっていうふうに、

(18) どういうことやるかっていうと

(19) 余計なことって

(20) いいことじゃないと思うんですけどね。

〔I〕

(21) 体に感じるものって

〔G〕

(22) 走れるものがあるのって

(23) よく、ガラガラって分け進むの、

(24) 風を自分で作るってもんで、

(25) 今日から秋だってのが

(26) 四季の変わりって

(27) そうすると

(28) そうすると

(29) 忘れてならないっていうの

(30) 二点セットというか

この20例を、文中での機能から分類すると、〈表-4〉のようになる。

〈と〉は、格助詞、接続助詞、副詞の一部として出現するが、中でも格助詞の〈と〉には、「動作・作用を共にする相手を表したり、動作・作用の結果を示す—と—」・「引用を受ける—と—」・「並立を表す—と—」があり、ここに使われている〈と〉は、「引用を受ける—と—」が圧倒的に多く、又その「引

＜表－４＞ （＜と＞と＜って＞）

番号	機 能	番号	機 能
11	引用（格助詞）	21	他との区別
12	他との区別（係助詞）	22	いいさし（終助詞風）
13	引用	23	副詞の一部
14	他との区別	24	引用
15	引用	25	引用
16	他との区別、引用	26	引用
17	引用	27	接続（＜と＞のまゝ残る）
18	引用	28	同上
19	動作の対象（格助詞）	29	引用
20	引用（＜と＞のまゝ残る）	30	引用

用のと」が、2例をのぞき、9例が＜って＞と促音化している。又、(12)・(16)・(21)も係助詞のような性質をもった格助詞ともいえる（注1）。接続助詞の＜と＞は、＜って＞とはならず、そのまま＜と＞として残っている。

格助詞のうち、引用を示す＜と＞は、＜って＞となって使われることが非常に多いが、そういいきるには、22人のゲストの発話すべてに検討を加えないといけない。又、個人による使用差も、検討を要する。

そこで、ケース6とケース16の2名のインタビューの中から、＜と→って＞をすべて拾い上げていくと、＜表－5＞のようになる。

次ページ＜表－5＞の2人のゲストの場合からも、引用を示す＜と＞は＜って＞となることが多く、又、終助詞ふうないいさしの形の＜と＞も＜って＞となる傾向を読みとることができる。

（注1） 岩波講座「日本語」7・p.380。

＜表－5＞

	〔G〕 ケース 6		〔G〕 ケース 16	
格 助 詞	＜と＞ ＜って＞		＜と＞ ＜って＞	
共に～する（と）	3	0	0	0
結果を示す（と）	2	0	0	0
引用を示す（と）	12	53	8	18
並立を示す（と）	27	0	8	0
接続助詞				
順接の（と）	9	0	3	0
逆接の（と）	0	0	0	0
場合、その時（と）	1	0	0	0
いいさし				
終助詞ふう	3	1	1	1

5. 使用の多い準体言の＜の→ん＞

撥音＜ん＞は、会話において非常に多く用いられている。ゲスト全体をみると、＜表－3＞から、書きことばの＜の＞の使用例24、撥音＜ん＞の使用例714で、その撥音化率は、96％である。又、ゲスト個々人のパーセンテージも、ほぼ90％以上を記録しており、個人差なく、＜の→ん＞という撥音化が、対話においては出現しているといえよう。再び、調査の方法のところで例示したケース6の対話の初めの部分から少しぬき出してみると、次のようである。

〔G〕

- (b1) すごく見えるんですよ。
- (b2) 所詮、そんなもんだからね。
- (b3) 思うんですけれどね。
- (b4) 世界だったんです。

この4例のうち、(b2)の「そんなもん」の＜ん＞は、「そんなもの」という形式名詞「もの」の一部が撥音化したものであるが、他の3例は、いずれも、準体言

を作る<の>が撥音化している。

また、ケース1では次のようである。

〔G〕

そうですね、あの左回りですので。あの、こういうところは、かなり、重要なところですよ。スケートは、左足が、とにかく強くなきゃいけないんです。左足の方が、かなり太いのが普通なんですよ。左の方がちょっと、細いので。

この中で「左回りですので」「細いので」といった、原因・理由を示す<の>の<の>は撥音化していない。この表現は、「左回りですんで」「細いんで」となることも可能だが、このゲストは、<の>を用いている。これに対し「強くなきゃいけないんです」では、準体言を作る<の>が撥音化している。

ケース2では、全対話中、<の>の使用は2回、撥音の<ん>を使った回数18回であるが、前者2回のうち1例は、原因・理由を示す接続助詞であり、他は準体言を作っている。

撥音化する<ん>の元の形<の>は、

(ア) 準体言を示す<の>

(イ) 形式名詞<もの>の一部の<の>

(ウ) 接続助詞<ので、のに>の一部の<の>

として考えられるが、(ア)・(イ)の<の>は、会話においては、殆んど撥音化して<ん>となり、(ウ)の接続助詞の中の<の>は、撥音化せず、元の形のままで使われている。

(ア)(イ)(ウ)の場合すべてを含めて撥音化されている割合をグラフにしたものが、<図-1>である。これにインタビュアーの同様の場合の撥音化率を破線に加えてある。ゲスト（女性）もインタビュアー（男性）もそれほどの差もなく、高い率で撥音化した音を用いている。ただ、ケース18・19・20・21・22のように、ゲストの年齢が高くなると、インタビュアーは撥音を使う割合が、ゲストより下まわっている。インタビュアーが、上記のゲストに対して敬意をこめた話し方をしていることがうかがわれる。

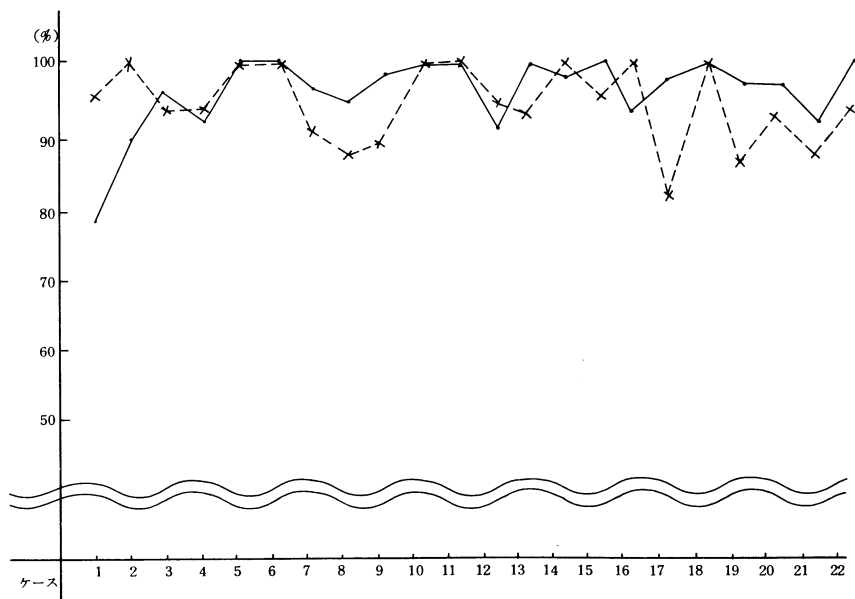
また、<図-2>は、<という>が<っていう>となる促音化率をグラフ化したものである。表示のないケース5などは、使う場面がなかったことを示してい

る。〈図-2〉は、〈という〉の促音化については個人差が非常に強いことを示している。そして、インタビュアーは、ゲストに合わせて促音を使っている様子がよみとれる。また、ケース20・21・22のゲストに対するインタビュアーの促音の使用率はかなり低く、ここでも撥音化の場合と同じく高齢者に対して、あらたまった表現をしていることがうかがわれる。

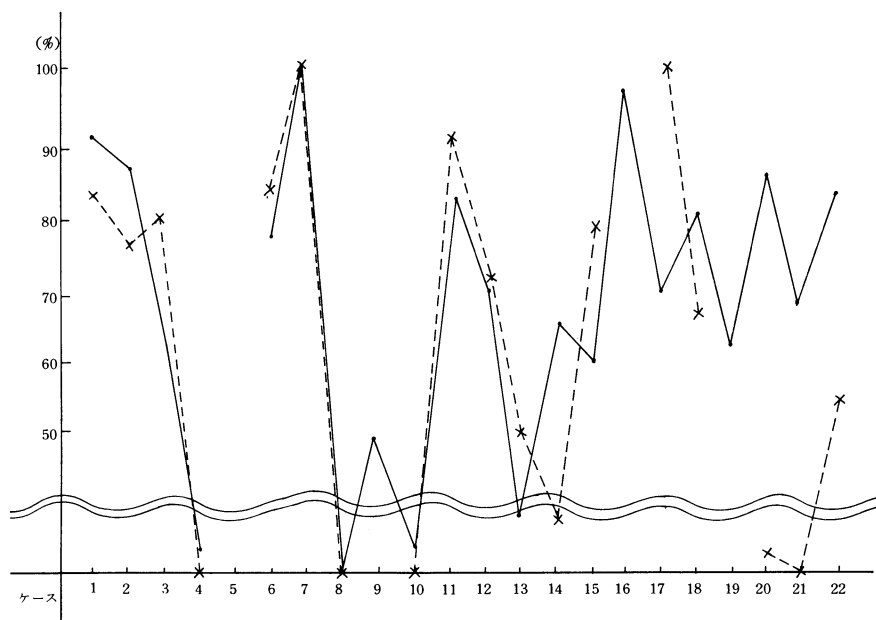
〈図-1〉・〈図-2〉から、対話における撥音・促音の使用は、相互に相手の立場をおしはかりながら、相互に影響しあいつつ使いわけている様子がみられ、男女の別で使いわけているとはいえない。

このふたつのグラフを含め、今までみてきたことがらをまとめて言えるのは、縮約表現 — 非丁寧表現と重なる部分が多い — の使われ方にも、きわだった性差はみられず、むしろ中性化しているということである。

〈図-1〉 ゲスト別「の」の撥音化率（破線はインタビュアー）



＜図-2＞ ゲスト別「という」の促音化率（破線はインタビュアー）



＜参 考 文 献＞

『話しことばの文型（I）』 国立国語研究所

『岩波講語 日本語4・7・8巻』 岩波書店

『比較音声試論』 酒向 誠

『音声学』 服部四郎

『日本文法講座』 明治書院

『現代日本語』 柴田 武編（朝日新聞社）

『新・要説文語文法』 日栄社

『国文法の基礎』 学宝社

『国語の文法』 明治書院

『「ことば」シリーズ』 文化庁

『実践・はなしことば』 NHK 他

—おわりに—

以上、テレビのインタビュー番組をもとに現在の日本の女性の談話を考察してみた。この資料は、NHKディレクター池田理恵子氏のご好意によるVTRをそのまま文字化したもので、対象となるゲストの女性たちは、偶然そのVTRに収められていた人々にすぎない。NHKとしての選択は行なわれているが、ことばをみる我々の側としては、何らの取捨選択も行っていない。そのような女性たち—20代から70代まで現在各界で活躍中—の談話であるから、現在日本女性の談話の実態をある程度まで正確に反映しているとみてよいと思う。

そうして、敬語の使用状況、終助詞の用法、名詞の使い方、縮約の実態と4つの観点からみた結果は、一般に女性のことばは丁寧である、敬語の使用が多い、といわれる通説に背く部分が多くあるという事実であった。

インタビュアーの男性との比較で、ゲストがそれほど敬語を使わないということは、インタビューする側とされる側という立場の違いを前提に考えると、ある意味では当然のことで、この結果だけで女性の敬語使用が少ないというのは誤りである。しかし、インタビュアーの敬語を用いた問いに対する直接の答えに敬語を使わない、というのは、ゲストの側に日常において敬語を用いた談話があまり行われていないという証佐でもある。

終助詞についても従来女性専用男性専用と言われでるものの枠がとり除かれてきている事実もわかった。

名詞については、男性との比較ができていないが、尊敬、謙譲の「お・ご」の使用が少ないという結果も得ている。縮約は、省略しない整った形の方が敬意があるとの考え方からみれば、やはり非丁寧の部類に入るわけで、それを女性がテレビ出演の中で多用していた事実も、現在の女性の談話の様相の一面として考えてみたい。

こうしてみると、女性の談話が従来いわれてきた女性特有の話し方というのではなく、男性女性共通のいわば中性化していることが鮮明になってくる。日常の女性同士の私的な話し合いなどは従来の傾向をひきついでいるかもしれないが、今回のテレビでの談話では中性化の傾向を示しており、今までの敬語に関する通説や文法書の記述との間にいくつかのずれがあることがわかった。

今回の調査はテレビに出演した女性の話しことばだけであるから、その範囲内での実情しか指摘できていない。今後はもっと広範囲に調査考察をひろげて、女性全般の話しことばの現状を知りたいと考えている。

なお、この研究の最後のまとめにかかっている丁度そのとき、『講座 日本語と日本語教育 第1巻日本語要説』（明治書院 1989. 9）が刊行された。そこに収められている堀井令以知氏の「男性の言葉と女性の言葉」という論文の結論が、我々の研究とかなり対立するものなので、ここで少し触れておきたい。

この論文には、

1.男女によって異なる言語。2.女房言葉。3.男女の京言葉。4.男の京言葉と職人言葉。5.山言葉・武士言葉・軍隊用語。6.男女の言語使用差。7.女の名前・男の名前など。8.男女の差別感・職業差など。9.終助詞の使いかた。10.舞子言葉・廓言葉。11.命名と性の意識・文法的性。の11の章に分けて主として京都の言葉をもとに男女の言葉の違いが述べられている。男女の言葉のつかい方、話し方について述べているのは6・9だけで、ここでの違いは6は音声上の差を女／男だけが用いる語として述べ、9は京言葉の終助詞による男女の使い分けを述べている。

以上の内容で、いくつかの位相による言葉の差を述べたあと1行あけて以下の1段落でこの論文は結ばれている。

一般に、男性の話しぶりは力強く支配的で、主張性が強く、率直で、権威を持ちたいと願う。女性の話しぶりは、柔らかで協調的で、えん曲的であるが、つまらぬ話題に熱中し、繰り返しが多いと言われる。こうした話し方の違いが語彙の選択にも見られるわけである。（同書 p.258）

この結びは極めて当突である。それまで言葉の、位相による違いを並べた11章の文章が続いてきたところへ、上記のようなそれまでには全く論じられていなかった男と女の話しぶりが論じられ、全体の結論にあたる位置におかれているのだから読む者は戸惑ってしまう。しかも「一般に……多いと言われる」というあいまいな表現である。

これが堀井氏の結論らしいのだが、その結論に至る過程が何も示されていない

のも不可解である。「一般に」と言うにはそれだけの裏づけと根拠があるはずだが、それは示されていない。

男性の話しぶりの、どのような資料に基づいて「男性の話しぶりは…強く支配的で…と願う」と断定されるのか。どんな男性を対象として考察された結果なのか。

また、女性の話しぶりは柔らかで…つまらぬ話題に熱中し…」とあるが、どのような調査からこのような結論を出されたのか。「つまらぬ話題」とはどんな話題のことを指すのか。つまり、つまらぬはだれが判断したのか。これだけ明快に言い切るにはそれなりの資料があつてのことと思われるので、ぜひその資料と調査方法を教えていただきたい。

今回の明治書院の講座の第1巻の日本語要説に、単独のテーマで唯一の論者によって書かれた論文であるから、この結論は今後かなり大きな位置を占めるものとなろう。だからこそ、「一般に」「多いと言われる」のような無責任な記述でなく、結論に至るプロセスを具体的に示し論拠を明確にされるべきであつたと思う。

今回の我々の共同研究では、テレビのインタビュー番組という限られた場面の女性の話しことばではあつたが、女性の話し方が男性より丁寧とか柔らかいとかの従来の説と反する結論を得ている。これは堀井氏の結論とは一部において一分析項目が重なる部分についてだけいえるが一矛盾している。そうだからこそ、堀井氏の結論に対する論拠を知りたいし、その資料と我々の資料をつき合わせて再検討したいと思うのである。

(資 料)

(ゲ ス ト 一 覧 表)

ケース	氏 名	(出場時の年代)	職 業
1	獅子井 英 子	20 代前半	スケート選手
2	俵 万 智	20 代後半	歌人
3	佐 藤 しのぶ	〃	オペラ歌手
4	宮 崎 美 子	〃	女優
5	藤 山 直 美	30 代前半	女優
6	三 好 礼 子	〃	モータージャーナリスト
7	神 田 陽 子	〃	講談師
8	関 口 典 子	〃	映画製作
9	柴 門 フ ミ	〃	漫画家
10	木佐貫 邦 子	〃	舞踊家
11	林 真 理子	30 代後半	作家
12	児 島 なおみ	〃	絵本作家
13	丸 山 由 美	〃	バレーボール監督・選手
14	白 鳥 笑美子	〃	歌手
15	熊 谷 ひろ子	〃	映画製作
16	佐々木 愛	40 代後半	女優
17	大 庭 照 子	50 代前半	歌手
18	村 崎 芙蓉子	〃	医師
19	小山内 美江子	50 代後半	脚本家
20	羽 田 澄 子	60 代前半	映画監督
21	石 原 英 子	70 代後半	席亭経営者
22	南 と め	〃	フィルム編集者

(インタビューを文字化したもの)

① ケース1の1部

I 「それで、仕事が一段落するのが?。」

G 「3時に終わりました、3時半から練習に入ります。」

I 「そうですか。それですと終わるのが…。」

G 「8時まで練習しまして、その後は皆で^{みんな}食事を作って食べて、それから解散です。」

I 「あ、あの、練習始める前には食事はしないんですか。」

G 「はい。あの、かなりハードな練習なので、食べてるとちょっと負担がかかって、胃なんかに負担がかかるので、もどしてしまったりとかあるので、あんまり食べないです。」

I 「あ、そんなにすごいですか。」

G 「そうですね。かなりもどすことが多い。」

I 「あら、そうですか。ふーん。でも、その中学生の頃からやってらしてね、みんなと一緒にこう伸び伸び遊ぶとかっていうのは、どうなんです。」

G 「人。ほとんどしてないですね。全然もう、中学校の三年生くらいからは、遊ぶことよりとにかくスケートっていう感じで、やってきたので、はい。」

I 「あの、今やってみたいこと。一番やってみたいことってなんですか。」

G 「そうですね。とにかく高校の時の友達なんかと遊びたいのもありますし、普通のOL的なことをしてみたいなっていうのが…。」

I 「ほう。普通のOL的といいますと。」

G 「そうですね。5時に会社が終わったらそれから、友達とちょっと喫茶店にでもよって、それから家に帰って、また次の日は普通に出勤してっていうことがしてみたいです。」

I 「(笑) なるほど。何かで僕は拝見したんですけどもね。あの、試合終わったら思いっきりぐれてみたい… (笑) なんですか。あれは。」

G 「そうですね。普通の人が高校時代にこう、友達といろんなところ行って遊んだりとか、新宿へ出たりだとか、銀座へ出たりだとか、そういうことを、思いっきり遊びたいっていう気持ちが、あります。はい。」

② ケース9の1部

G 「最初のうちは、子供があかばうのうちは足でゆりかごをけりながら書いてたんですけど、半年ぐらいたつとやっぱりはいはいとか始めて、さすがにそれも出来なくなって、やっぱりもう漫画なんか書けないとか、私が言いだしたら、主人がじゃうちのおふくろにみてもらうよと言ってきて、主人の両親が来てくれたんですね、それで仕事のあいだは子供のめんどろみしてくれるようになってもらって、それで仕事出来る態勢をととのえられちゃったんですね。」

I 「あらためて、職業意識めざめたと。」

G 「それであの、そうなんです。子供生んでみると、それまであの、子供が生まれるとどんなにあのこう楽しいお母さんになるんだろうとか勝手に夢えがいてたわけですね。めくるめく楽しい母と子の世界とか思いをえがいていたんですけど、実際のことただ寝ているだけとか、ただなだけとか、なんかあんまりね、楽しくないなとかという点もけっこうでてきたりして、で、子供の世話だけしていると不思議に漫画書きたいなっていう気分に出てきたんですね。」

I 「いまは、マンションのほうにですね、こう通って仕事していらっしゃるといふ、ま自宅で作ってらした頃の仕事の場の雰囲気をちょっと拝見することにししょう。」

I 「これはマリちゃん、ですか。」

G 「はいそうです。」

I 「かわいいですね。」

G 「これはまだいつかよっつの頃ですね。」

I 「子供はへやで遊んでいる、こちらにくと台所。」

G 「台所の横のへやで私は仕事をしてたんですね。」

I 「あの奥の。」

G 「そうです。奥の部屋で。」

I 「子供が話しかけてくるでしょう。」

G 「かってに入ってきますね、いくらだめと言っても、それで、私がこう原稿を書いているとまりこというんですけど、まりこもお仕事しようかな、なんて…」

③ ケース 15 の 1 部

- I 「あ、そうなんですか。へえ。ま、あの今回ですね。このシルクロードの十字路というふうにですね、あの、アフガニスタンとの合作の記録映画ができた訳ですけども、原地には、かなり長く…。」
- G 「えっと。4 カ月あまりいました。最初があ、昨年の 5 月 15 日の時ですね。それから昨年の 9 月から 12 月。』
- I 「それじゃ。一番この…。」
- G 「ゆれてる時ですね。本当に。」
- I 「ゆれる時ね。ホウホウホウ。ま、あの、この十年で本当に、むこうの方達、難民ですとか、それから亡くなった方ですとか、ずいぶんたくさんでたんですよ。」
- G 「え、あの、人口ま、1,500 万人以上と言われてるんですけども、ま、推定ですけどもね、100 万人以上は亡くなっていると言われていてです。そうすると、国民 15 人に 1 人ですよ。それから難民が、国連統計で 550 万人でてるんです。ホントにあの、人口の 3 分の 1 が難民で、まインドとかパキスタンへ出てしまった。』
- I 「そういうふうにしてこう、難民になったという、ね。あの、記録映画の、その、戦争ということで人々の暮らしの、素顔というか、ま、どういうことが焦点になりますかね。」
- G 「そうですね。単なる、こう戦争映画は作りたくなかったんですね。もっとあの、なんていうのかしら、アフガニスタンのあの、なんか深いところをね、こう、なんかものとか、それから人々とか、ま、（みつめて）いけばいいなというのがありまして、はい。」
- I 「じゃ、その記録の一部をですね。皆さんでござん頂きたいと思います。ちょっと、お話をうかがいながらお願いします。』
- G 「これが首都の、あの、カーブです。」
- I 「ええ、私達カブールというふうにこう。」
- G 「そうですね。あの原地の発音では、カーブの方が近いんですね。」

④ ケース20の1部

I 「四年ほど前に、お作りになりました『痴呆性老人の世界』っていうの、大変な反響…。」

G 「え、あの、まあ、いわゆる地味なドキュメンタリーで、これだけ多くの方に見られるってことは、なかなかないと思うんですね。」

I 「どのくらいの方がご覧になりましたんですか。」

G 「えーとね、このあいだ、その、上映の事務局の人に聞いたら、ま、ざっと21万人ぐらい。」

I 「ははあ。」

G 「まあ、約、丸3年ってことですかねえ。だから、やっぱり、相当な方が見てくださった、ええ。」

I 「ああいうのは、いわゆる、自主、製作っていう。」

G 「あの、この、前作りました『痴呆老人の世界』は、岩波映画製作所の製作なんです。で、まあ、今回作ってますのは、自主作品っていうことになりますけど。」

I 「はあ、なるほどね。そういう、あの、『痴呆性老人の世界』でここ一番お感じになったことって、どんなことでしたか。」

G 「あの一、なんか痴呆性老人っていうと、なんにも分かんないんじゃないかと皆さん思うし、ま、お話しすれば、とんちんかんていう感じですけど、あの、それぞれ、ハートっていうんでしょうか、なんかこの、自分がそれなりに、いっしょけんめい生きたいっていう気持ちはね、みんなかわらずに持っている。そういう、こう、あの、その、人々の、こう、生き方っていうのは、その、知能がああ低下してしまっ、おかしくなっている、かわらずに残っているっていうことが、とても、感動的でしたね。ええ、だから、その、やはり知能がおとろえているから、することなすこと、おかしいけれど、その方の身になって考えてみるとそれなりにね、ああ、そうなんだがなあと思うことがあって、あの、最初は、なんか、ちょっとびっくりしましたけれど、あの、だんだん、お付き合いしているうちに、あの、とてもなんか、あの、こう、ジーンとし…」